

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和5年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立赤松小学校
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・全項目で概ね目標を達成できた。できるだけ目標値を具体的に設定して達成に向けた努力を続けてきたことが職員の学校評価の意識向上につながっている。 ・「あいさつ」については、コロナ禍の状況で声や表情が曖昧になりがちで、指導に苦慮する状況があるが、コロナ禍後の日常を見据えて根強い指導が必要。 ・学力向上では、テスト学力のみならず、「資質・能力の育成」に主眼を置いた指導について、全職員共通して取り組まなければならない。

2 学校教育目標	ふるさと赤松を大切に 夢をもった子どもの育成 【めざす子どもの姿】 あいさつする子（徳） かんがえる子（知） まげずにがんばる子（体と心） つながる子（関わり）
----------	---

3 本年度の重点目標	〈今年のスローガン〉 出番・役割・承認 ①確かな学力の向上 ・資質・能力の育成を意識した授業づくり ・赤松トレジャーの徹底 ②豊かな心の育成 ・相手を大切にした言葉遣いの指導 ・体験活動の充実 ③体力の向上 ・運動嫌いをつくりたくない授業づくり ・体育的活動の充実
------------	---

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

(1)共通評価項目				最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
				達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践 ・学習内容の定着に向けた分かりやすい授業の実践 ○金曜日の朝の時間にスキルタイムを設け、全校でスキル学習に取り組む。 ◎校内研究において、【粘り強く考え、挑戦し続ける児童の育成】を目指す。	○「めあてとまめを対応した授業を意欲している」と回答する教職員が85%以上にする。 ○スキル学習を月2回以上実施し、「分かるようになった」、「できるようになった」と感じる児童を80%以上にする。 ◎(学校独自成果指標・任意) 「学習や運動において、粘り強く取り組むことができた」と回答した児童80%以上を目指す。	・分かりやすい授業にむけて、子どもの発言を活用したり、一緒に考えたりして(めあて)を作る。(まめ)は分かりやすい言葉を活用したり、協働で考えさせたりする。 ・3年生以上でタブレットPCを月2回以上活用し、スキル学習に活用できる教材の活用と職員研修を定期的に実施し、活用できるようにする。 ・算数科や体育科の授業において、児童が試行錯誤するような場面を設ける。更に、学習をより深めるために対話的活動やICTを取り入れた授業実践を行う。	A	・めあてとまめを対応した授業を意欲していると回答した職員が100%となった。全職員で共通理解が進んできた。また、児童も80%の子が、めあてやまめ、自分の考えを言っている。児童にも実践していることが分かる。 ・ICTを活用した授業を行っている職員が100%となり、よく活用していると回答している児童も80%に達した。ICTの活用が進んでいる。	A	・赤松小の活用率はすばらしい。佐賀県全体の活用率が上がるように、赤松小がぜひ事例を紹介してほしい。
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○ふれあい道徳の授業実践を100%行い、保護者や地域の方に対しても、道徳教育の啓発を行う。	・あらゆる学校教育の機会(道徳の授業実践を要とし、道徳教育を全校朝会・児童朝会・ぬくもりタイム等様々な教育活動の機会を捉えて行う。)を捉え行う。	A	・「授業の中で、あらかじめ考えたり、友達に相談したりして、粘り強く取り組んでいる」と回答した児童が92%であった。これは、職員が校内研究の教科である算数科や体育科をはじめとして、様々な教科において、児童が試行錯誤できるような場面を仕組んで授業を構成した成果である。(95%の職員が試行錯誤場面を設けたと回答)	A	・「個性を理解し興味をもつ指導」先生方の探求の賜物だと思う。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○毎月一回のアンケートをとり、児童の心の変化や悩みを早期発見、早期対応できるようにする。 ◎保護者アンケートで肯定的な回答を90%以上にする。	・子ども支援全体会や連絡会等で要支援の児童や、心の変化がある児童の情報共有し、対応していく。	A	・「授業の中で、あらかじめ考えたり、友達に相談したりして、粘り強く取り組んでいる」と回答した児童が92%であった。これは、職員が校内研究の教科である算数科や体育科をはじめとして、様々な教科において、児童が試行錯誤できるような場面を仕組んで授業を構成した成果である。(95%の職員が試行錯誤場面を設けたと回答)	A	・「個性を理解し興味をもつ指導」先生方の探求の賜物だと思う。
●心の教育	●◎児童がふるさとを大切に思い、夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「クラス・友だち・自分のいいところを見つけることはできた」と回答した児童80%以上 ●◎「将来の夢や目標をもっている」について肯定的な回答をした児童80%以上 ●ふるさと赤松のよさに気付いている児童70%	・ぬくもりタイムやハッピートーク等の活動を通して、自己肯定感を高め、意欲につなげる。 ・コミュニティの活動や地域行事の紹介をしたり、地域教材を活用を促進したりする。	A	・「授業の中で、あらかじめ考えたり、友達に相談したりして、粘り強く取り組んでいる」と回答した児童が92%であった。これは、職員が校内研究の教科である算数科や体育科をはじめとして、様々な教科において、児童が試行錯誤できるような場面を仕組んで授業を構成した成果である。(95%の職員が試行錯誤場面を設けたと回答)	A	・「個性を理解し興味をもつ指導」先生方の探求の賜物だと思う。
	●「運動習慣の改善や定着化」 ●◎「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」 ●「安全に関する資質・能力の育成」	①授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間以上420分以上の児童生徒80%以上(小学校60%以上、中学校80%以上の数値で学校の実情に応じて設定) ②(学校独自成果指標) ●「健康に良い食事をしている」児童生徒95%以上 ④児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にする	・スポーツチャレンジなどの啓発や全校で取り組む運動(マラソンやスポーツフェスタ)を推進し、児童が体を動かすことの楽しさを感じることができるようになる。 ・給食時間にメッセージを放送したり、「スポーツと食」について委員会などで企画・運営するなど、健康と食事に興味を高める。 ・校外を巡回し実態把握に努めるとともに、気になった点を放送で注意喚起したり担任から話をし、安全に対しての意識付けを行う。	A	・年間を通して、ぬくもりタイムとハッピートークを通して自己肯定感を高める場づくりを行うことができた。 ・「将来の夢や目標をもっている」児童のよさに気付いている児童はどちらも目標数値を大きく上回って達成することができた。全学年でコミュニティを積極的に活用し、地域との連携を図ることができた。	A	・「個性を理解し興味をもつ指導」先生方の探求の賜物だと思う。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間削減 ○職員室机上、棚等、職場内の整理整頓の徹底	◎教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 年間360時間以内・月45時間以内 ○業務後は、机の上にパソコン以外置かない取組の継続。学校環境の整理整頓。	・時間外業務の状況を毎月個人へ公開し、360時間の消化割合を示すことで自分自身のタイムマネジメント力を育む。 ・会議、連絡会終了後の机上、棚等の整理整頓の時間を確保する。	B	・月の時間外勤務時間は少しずつ減少傾向にある。また、長期休業中は積極的に年休取得を勧めた結果、取得率も上がってきた。職員は仕事のonとoff切り替えがきつ々ある。 ・職員室をはじめ、倉庫等の片付けは随時行っている。特に、夏季・冬季休業時は職員作業を設定し、日頃掃除が行き届かない場所を清掃し、整頓することができた。	B

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
				達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
○特別支援教育の充実	○全職員、全クラスがインクルーシブ教育を意識し実践する。 ○教室に入れない児童対応の体系化	○(学校独自成果指標・任意) ・配慮、実践している教師90%を目指す。	・研修会、書籍などで研鑽を積み、日々の関わりを生かす。 ・個別の教育支援計画・個別の指導計画を有効的に活用する。 ・日常的に、個別の支援が必要な児童に関する情報を交換する。	B	・意識して対応しているとの回答が教師、保護者共に90%以上に達した。特別支援教育が支援学級だけのものではないことを意識し、スキルを高めている。しかし保護者アンケートには、分からないという回答もあり理解啓発も必要。	B	・UD教育講演などを親子で聞く機会があれば、特別支援教育について知る機会になるのではないかと。 ・特支に通学されているお子さんの保護者さんの思いも共有できれば、よりよいインクルーシブ教育につながっていくのではないかと。
○コミュニティスクールの推進	●学校運営協議会の協議内容やコミュニティ活動の様子をコミュニティ便りやHPで職員や保護者、地域に知らせる。 ◎活動内容や活動方法を工夫しながらコミュニティの活動の活性化を図る。	○地域活動への参加意識を昨年度よりも5%高める ◎すべての児童が9つのうち5つ以上のコミュニティと関わることができるようにする。	・コミュニティ活動の情報をHP・掲示・配布物等で発信し、より多くの方の理解や協力を得る。 ・地域連携が地域の話し合いや行事に参加して情報を交換し合い、地域の方々の思いや願い、考え等を知る。	B	・コミュニティスクールについて理解しているとする保護者の回答が86%であり、今後とも継続して周知を図る努力が必要である。 ・地域のイベントや行事に参加したと回答した児童は69%と低かった。学校外でのイベントなどに、積極的に参加しようとする意識を高める手立てを今後工夫する必要がある。	B	・地域行事への参画は、子どもたちにとって地域づくりの一員としての自覚をさせることにつながる。この子たちが次世代の赤松地域の主役として活躍することを期待している。 ・地域との交流については、まち協やこども育成会、PTAとの話し合いをして参加しやすくなるような仕組みを作れないものか考えるところである。

5 総合評価・ 次年度への展望	●…果共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育 ・職員が校長が示す学校教育デザインを受けて、学校評価項目(成果指標・具体的取組)を考え、学校評価アンケート作成まで関わったことで、目標達成への意識が向上し、特に各部での取組が活性化された。 ・赤松小の特色でもあるCSが来年度18年目を迎える。現状の課題解決を見据えながら、更に「地域と共にある学校作り」をすすめていきたい。 ・教員不足や長時間労働が深刻化している中、職員にとって、やりがいのある仕事となるよう、さらに働きやすい職場作りを励む。
--------------------	---